

# 晶子と鉄南・雁月

——未発表晶子書簡を通じて——

塩 田 良 平

君に文書かむと借りしきよし野の竹林院の大硯かな

——佐保姫——

与謝野晶子が生前吉野の竹林院を愛したことは有名だが、この竹林院にからまる晶子の思ひ出は、明治卅三年彼女が廿三才の春に逝る。

晶子には堺時代に二人の文学好きの友達があつた。一人は河野鉄南、他の一人は宅雁月、まだ他にゐたかも知れないが、文献上に現はれた親交のある男友はこの二人である。

河野鉄南宛の晶子書簡が廿九通発見されたのは去る昭和廿七年で、この紹介については嘗て「婦人公論」(三〇・一〇)に発表したから、詳細はそちらに譲るとして、ここではそれに発表しない未発表の書簡を一つあげよう。彼女が妹里子とその乳母と吉野に行つた時の消息である。

はなよりあくるとあるさまこそあわれ。ほのくゝと吉野のさくらしらみしけさの暁の色みては、すぐかきし文のあまりにこゝろな

きとそんじ候まゝ、一寸とかきそへ花に謝さんかなとそんじ上候。今は五時頃にや候わんに、三時に、はやあかく相なり候。山高きが故と乳母の申候。この文御もとにとゞくより私が帰るかたのかへりてはやきかもしれず候。

併し、私がさすがに捨てがたしと申は、竹林院の暁のいろにて、よし野はけふもよし野に候はんか。

美よしのや竹林院にひと夜ねて花にきつねのなく声きゝぬ

(句読点は筆者)

この手紙は右のところで一たん巻紙が切れてしまつてゐるが、この残りの部分と思しきものが、別の巻紙に書かれてゐるので、それを左に続ける。

よしの山遠山ぞめのかつぎして花の袖口にほやかにたつとはうたひしものゝ、まことは「夢に見しよし野は花の名所かな」の紅葉の句をうたかひしわが身くやしとそんじ候。

前の千本、中の、おくの、ときゝても、いつの世にたがいつわり

そめし名ぞとよりのおもひよりをこらず候。

吉水院に南朝の遺物を見て、浅からず趣味を覚えしことより外にきこえ上べき事はおはさず候。今かくしてある竹林院のあたりは、花はあまりなけ<sup>マ</sup>どそれだけ俗味が少なく候。

こゝが吉野のもつともたかきところと申候。さすがに花の香おくる山風に、ともし火あやふげなるもとに、しめやかにかたるおとゝひをおもひこさせ給へ。黒きつむぎに緑の帯をやの字に結びて、赤きリボンさしたる人と相對しては、(十字不明)がと、わがびんぐきの色あせにしをおもひしられ候。さてもいく重の雲のよそに、如何におはすらむと、よしの野のおくの古寺に、ひたすらおもふ女なりと君しりますや。この花は竹林院のにはのをひろひしに候。すみれは六田のわたしのほとりのに候。あすは奈良へよりて帰らましなど、妹とかたり居り候。同行はそが乳母なる人とのみたりに候。

先は阿らくかしこ

鉄 南 様

御もと

小 舟

封筒の表は「和泉堺市九間町東三丁 覚応寺にて 河野鉄南様貴下」とあり、裏は「四月十七日夕 露花生」とある。年代は明治卅三年である。小舟は晶子の号。「よしあし草」十一号(三二・二)に「春月」といふ題名の新体詩を初めて発表した時、鳳小舟と署名してゐる。

露花生は晶子の変名で、彼女は男友達に手紙を出す時には別に新

星会、沼州漢士、春光生、などの変名を使ひわけてゐる。

河野鉄南なる人物を説明すると、堺、寺町の真宗本願寺末寺、覚応寺の一人息子として生れ、当時母と二人住ひである。河野家は河野通有の裔であり、覚応寺は正中山覚応寺といはれ、中々の名利だが、当時有力壇家がゐなかつたため、貧乏寺といはれた。鉄南はその若住職で、明治七年生れ、本名通談、鉄南はその号である。因みに、与謝野鉄幹は幼少時大阪府住吉郡遠里小野村安養寺に養はれ、安藤寛を名乗つてゐた。安養寺は西本願寺派であつたので、覚応寺とも親しく、その関係で鉄幹と鉄南とは幼友達であつた。鉄幹はやがて安養寺を去り、幾変転して中央詩歌壇に名をなし、後になって堺の鉄南にも文学上の同志として再び呼びかけるやうになつた間柄である。

鉄南が文学上に関心をもち出したのは明治卅一年二十五才頃である。これより先、卅年四月、大阪に於て中村春雨、高須梅溪、河井醉茗、伊良子清白、小林天眠などが集まつて、浪華青年文学会を興し、機関誌として「よしあし草」を発行した。ところで同人中河井醉茗は堺北旅籠町の呉服屋の息子だったが、この醉茗を中心にして堺の文学青年たちが、浪華青年文学会の堺支会を翌年卅一年に結成した。それに河野鉄南、中山梟庵、宅雁月などが加はつた。鉄南は寺を負つてゐる身であり、必らずしも文学に身を立てる志はなく、それに貧乏寺であつたために、一時代用教員などをしたくらゐ生活的にも余裕がなかつたが、文学的な才能は醉茗を除いた仲間の中では恵まれてゐた方である。

駿河屋の娘鳳晶子が鉄南と知り合ひになつたのは、この堺支会を

通じてである。晶子には仲のいゝ弟がゐた。籌三郎といふ。例の「君死に給ふことなかれ」の主人公である。晶子は十一年十二月七日生れ、籌三郎は十三年八月十四日生れ、だから二つ年下の弟である。籌三郎と小学校が同窓で同じ十三年の五月一日生れの友人に、宅千太郎がゐた。「また六」といふ酒問屋の伴で、後父平次郎を襲名したが、この千太郎が文学好きで、新体詩や新派和歌を嗜んでゐたので右の堺支会に加はつた。そして雁月と号して「よしあし草」に作品を発表したが、この雁月と友人の關係から、まづ籌三郎が支会に加入し、つゞいて姉の晶子が加はることになった。そして「よしあし草」に鳳小舟の号で投稿した。彼女はもとゝゝ旧派和歌を作つてゐたが、「よしあし草」に投稿するやうになつて、その詠じ方は全く變つた。中央文壇の雑誌を読んでゐたし、又堺の文学友達の相互影響もあつたのだらう。

宅雁月は弟籌三郎に会ひによく駿河屋にも遊びに来たらしい。勿論晶子とも言葉を交はす機会があつたらう。晶子も弟の友達で、年下の青年だといふことから、らかな氣持で接してゐたらしい。しかし他の男友達は妻帯者の酔客を除く他殆んど会ふ機会はなく、たゞ発表誌上を通じてその人柄<sup>ひとなり</sup>を推察するに止まつてゐた。

晶子が初めて鉄南に會つたのは卅三年一月、浜寺で堺支会の連中達、前記の雁月を初め辻本秋雨、河井醉茗達と初の懇親会をやつた時である。鉄南は雁月と違つて、品のいゝ好男子だった。彼女の美男好みは一生涯つきまといつてゐるが、どうも雀百まで踊りを忘れぬ例の通り、そもゝこの頃からその面くひの癖は初まつたらしい。

さて、初印象ですっかり鉄南にのぼせた彼女は、三日にあげず

鉄南に手紙を出してゐる。その中の一通が右に挙げた手紙で、これなどはまだ序の口の方で、大人<sup>おとな</sup>しいものである。当時晶子はまだ廿三才の大柄の女だったが、趣味は全く文学少女趣味で、古典や外国文学を通じて多情多感な思ひを披瀝したり、娘らしい家庭的な悩みを訴へたり、かと思ふと、自分は一生結婚しないと余計なことを言つてみたり、雁月が何かと噂をするのを真にうけて、鉄南を恨んだり、例へば「このもだゆる少女をあはれと御思し、何とぞはやく、何とか御仰せ被下度候。二三日も御返事御まち申してもなき時は、私は死ぬべく候」などと、おどかしたのやら、訴へたのやら、訳の判らない手紙を書くやうになつた。この間のことは嘗て書いたことがあるからここでは略すとして、とにかくこれらの手紙は既述したやうにすべて変名である。やはり堺の町は旧く、覚応寺のおつ母<sup>おつ</sup>さんは恐しく、世間も怖<sup>こわ</sup>かつたに違ひない。勿論二人が互に會ふなどといふ芸当は出来るものではない。晶子は老舗駿河屋の嬢<sup>い</sup>はんであり、女中なしでは外出は出来ないし、鉄南は元帳面な母の監視の厳しい寺の子であり、言はゞ「たけくらべ」の信如のやうに、女と二人で話をするのさへ道ならぬことのやうに育てられた坊ちゃん型の青年だった。駿河屋は甲斐町にあり、覚応寺は寺町にあり、その間は何町とは隔たらない距離にあるのだが、二人が會ふなどといふのは当時の慣習<sup>しきたり</sup>から言つても離れ業であつた。又會ひたいとは訴へつゞけても、會はうとはしないところにこの当時のロマンティズムがあつたのだらう。しかしそれだけに晶子の氣持は、手紙の上では奔放を極めた。時によると、全く判読出来ないほどなぐりつけたやうな書体で悶々の情を述べている。早熟な情思と幼稚な筆致と

が入り混った感じである。

さて、先に挙げた吉野からの手紙だが、これはまだそれ程情熱的でないにしても、すみれの花を封入したり、桜の花弁を封ぢ込めたり、少女らしい趣味にかくれて何となく物思はせぶりの情感が漂ってゐることは見のがせない。現存の二十九通の手紙を読んでゆくと、そこに晶子の感情の高まりの経路がほの見えて、鉄幹を知らない前に、晶子にはこのやうな心的経験があつたのかと驚かされるが、それは又田舎娘の青春の思ひ出として、考へ方によれば掬すべきものがある。そして、それから後に、彼女がこの鉄南の紹介によつて鉄幹を識るやうになり、今度は鉄幹一辺倒になつて「我は罪の子」などと鉄南にあやまつてゐるところなどは、なか／＼深刻な感じを与へるのであるが、ところが實際の晶子は、それほど純粋な少女ではない。言ひ換へれば、鉄幹を知るまでは鉄南に夢中になつてはゐたが、では鉄南だけに青春の思慕を打ち明けてゐたのかといふと、必らずしもさうではなかつたから恐れ入つたものである。

その証拠が今度現れて来た。実は二三年前に、大正大学助教佐藤亮雄氏によつて発見された雁月宛晶子書簡十通ばかりの内容といふのが、それである。これもまだ公表されてゐない未発表のものであるが、その中で同じく吉野から出した一通だけを左に掲げよう。さきに挙げた鉄南宛の手紙と同じ時、同じ場所で書かれたものであるが、何卒二つの文面を照し合せながらよく読んで頂きたい。

封筒の表は「和泉堺市柳町宅平次郎様方 雁月様」とあり、裏は単に「よし野 竹林院にて」とのみある。日附は明治卅三年四月十六日附け口便の消印が大和上市局で押され、それが翌十七日堺のイ

便で配達されてゐる。

ほの／＼と（汚損欠字）のさくらしらみしけさの暁の色見ては、すぐかきし文のあまりにこゝろなき（汚損欠字）いたし申候。今は五時頃に候はんに、三時にもう夜があげ候。山たかき故と乳母の申候。六田のわたしよりこゝまで二里程も御座候。あなかしこ。わがさすがにすてかたきと申は、竹林院の暁の色だけに候。よし野はけふもきのふのよし野に候はんか。

美よし野や竹林院にひと夜ねて花にきつねのなく声きゝぬ

（句説点筆者）

この手紙も一たんこゝで切れてゐる。恐らく一度こゝで筆を擱いたか或は紙の都合によつたのかそこは判らない。こゝまでの用紙はピンク色の薄様の巻紙である。書体は鉄南宛のものよりやゝ乱暴である。字も後年のやうな細字ではなく、かなり大きい。ところが、この続きと思しき手紙が、今度は水色の薄様に書かれてゐる。この当時は今のレターペーパーと同じく、平安朝式にいろ／＼な色の薄様を使つたらしい。現に国木田独歩の友人宛に出した手紙などを見ても、男のくせに桃色の薄様を使つてゐる。どうも明治卅年前後の所謂ロマンティズム時代に入りかけの頃は、こんな薄様が流行（はや）つたらしい。それがもう少し時代が下ると、即ちペン書時代になると、各種のレターペーパーに紫のインキといふことになる。（鉄南

宛の薄様も右雁月宛と同じ)

さて、雁月の後半の文面だが、それは左の通りである。

見やる雲のいく重よそにゐて、君こよひたが上を思しておはすらむとのみ、(欠字)よし野の花も月も何ならず。

つばさなき身をひたすらにうちかこたれ申し候。「夢に見しよし野は花の名所かな」との紅葉のくをうたがひし、わが身くやしく候。前の千本、中のおくのとくも、いつの世に、誰がいつはりそめし名なるらむとよりのおもひより、をこらず候。たゞ吉水院の南朝の遺物には浅からぬ趣味を覚え申候、とのみより申上る程の事はなく候。

よし野山遠山染めのかつききて花の袖口にほやかにたつ

御はづかしくぞんじ上候。こゝ竹林院はよし野にて、もつとも高きところと申候。この辺には余り花もなく候。それだけ俗味がなく候。今かくしたゝむる時、こゝの鐘ふたつなり候。

かなたにたゞ一軒ある家のともし火、やみになつかしくまたたきをり候。月はちらりと見たばかりのそれに候。何れまたよく御話し致すべく候。この花は竹林院のにはのをひろひしに候。

すみれは六田の渡しのはとりにてつみしに候。手箱に残せし松のはの、かくしてあるまに色やかへむと、たゞそのみ。

花にみしよし野のやどのともし火の小ぐらきかげに君をおもふかな

ちび筆かみつゝ

小 舟

志ら桃の君

おもとに

これを鉄南宛の手紙と比較すると、同文、同歌の部分で幾箇所もあり、又何れにも、ところ／＼に思はせぶりな泣きどころがあり、さぞかし晶子も書き分けるのに苦労したらうと思はれる。しかし、雁月宛の手紙の方が比較的細やかに書かれ、親しい弟にでも出すやうな筆致が見られる。雁月は河井醉茗などに言はせると、人間としては軽薄でお・ち・よ・こ・ち・よ・い・だ・つ・た・ら・し・く、現に「また六」も彼の時代で潰してしまつたし、彼の最後もいはゞ陋巷に身を終へたといふ感じが強い。しかし一方、それだけに人に馴れやすく、晶子にもはかない思慕を寄せてゐたらしい。そして晶子も弟の友人だといふ親しさもあつたか、適当にあしらつてゐたらしいことは他の書簡でもよく判る。

ところで、その雁月宛の書簡だが、右に挙げた書簡のみでなく、雁月の持つてゐた晶子の書簡は保存が非常に悪く、封筒と中身がばら／＼であり、巻紙も汚損甚しく、右の手紙なども、一度水に濡したか、ピンクの赤が水色の巻紙の方へうつてゐて、まるで涙で紅をにじませたやうな感じである。たゞでさへ晶子の文字が判読し難い上に、紙がよれ／＼になつたり、破れてゐたりして、一層読めなくなつてゐる。この原因は、雁月が生前彼女の手紙を愛玩しすぎて坐右を離さなかつたかららしい。つまり、我が初恋の女性として晶子を思慕するあまり、何時も身につけてゐたらしい。彼は晩年中風で寝込んだが、その書簡をふくさに包んで首に巻きつけて寝てゐたと

いふ。寝がへりを打つ度に、妻に手を添へてもらつて、その包の位置を前後して貰つたといふから、大変な執心だったのだらう。もつとも夫人はそれが何であるかは当時は知らなかったらしい。もし知つてゐたら、いゝ氣持はしなかったらう。これでは手紙がよれよれになるのは当りまへである。しかしこの文面でも判るやうに、雁月が晶子に愛せられてゐたと信ずるのは無理はない。勿論当の晶子は、死ぬまでそんなことは氣附かなかつたであらうが、そこに晶子の無意識ながら一種の思はせぶりがあつたのである。

余談だが、漱石の「三四郎」の中に美禰子といふ女性が出て来る。彼が美禰子を書くに當つてゾーデルマンの作「アンダインパス」中の女性フェリシタスの性格をまねしようとしたらしいが、その性格といふのが、漱石に言はせれば無意識的偽善者である。つまり、女性が持つ本能的な媚<sup>こび</sup>であつて、いはゞ思はせぶりを指すのである。愛してゐるやうに見せかけて男を嬉しがらせるテクニクで、それは女性にとつては意識的なテクニクではなく、本能的なものだといふことだ。もつと下品に言へば、所謂娼婦性に近いものを指すのだが、このことを、そのまゝ晶子にあてはめるのは少し酷だが、どうもこの二人宛の手紙を読みくらべてみると、晶子にも無意識ながら二人にいゝ子にならうとする氣持がなくはない。これが時を隔て、所が違つて書いてゐるのなら別だが、同じ時に二人の男を同時に思ひ出して手紙を書き分けてゐるのだから、晶子も多情でないとは言へなからう。

さて以上のやうに説明してくると、この二つの手紙の使ひ分けから察しても、晶子の手紙は、要するに彼女の恋の手習草紙のやうな

役割をしてゐたことが判る。鉄南にはやゝ兄事氣味があり、雁月には姉さんぶりが發揮されてはゐるが、要するに、彼女の青春のはけ口をこの二人に求めてゐたことは事実であらう。文学好きの少女には、書けば氣が晴れるといふやうな感情が存在するもので、一葉の男性宛の手紙を見ても、まるで恋文みたいなものがあるが、それは彼女の文学的誇張癖であつて、必らずしも真意ではないことが多いのである。それを真に受けると、とんだことになる。

晶子の場合も言ひたい放題のことを鉄南や雁月に書いて、自分の青春を飾つてゐたとみるのは意地の悪い見方であらうか。たゞ鉄南はそれに乗らず、雁月だけがそれを信じ込んで、その言葉を一生肌身に離さず抱きしめてゐたとすれば、晶子も知らずして罪をつくつたことになり、又雁月の心情を考へてみれば、あはれにいちらしいとも言へよう。とにかく当時の晶子の心中には、はっきりした自覺はなくとも二人の男を手玉にとるといふやうな小惡魔的な惡戯<sup>いたづら</sup>氣が交つてゐないとは考へられない。いはゞ晶子は二人を土合にして、その空想心を満足させてゐたといふわけである。

ところで、今度は私が勝手に想像するのだが、もしこの手紙を、当時鉄南と雁月が二人で見せ合つたとしたら、どういふことになるだらう。「何だ、君も同じことを書き、同じ歌で間に合はされたか」と何々大笑して、晶子を許すか、それとも「何だ、要するに作文か」とあきれて晶子を黙殺するなり、諦めてしまふか、どちらかだったらう。ところが、男といふものは可愛いもので、かういふ時は紳士の道を守つて、案外御互に秘め合ふところがあるから、晶子のアンコンシャス・ヒボクリシーもこゝで馬脚を現はさないで済

んだわけである。

その晶子はもとよりのこと、鉄南も雁月も、今はもう此世には居ない。すべて青春の一ときとして済んだことだし、別に今この手紙を公表したとて、誰を傷つけるわけでもあるまいから、新資料紹介を兼ねて駄文を弄した次第だが、晶子の他の書簡については何れ又与謝野家の許可を得て誰かゞ紹介する時もあるらう。因みに前記の書簡中の歌は、勿論晶子の何れの歌集にも入っていないものである。

— 大正大学教授・文庫 —